

Alnus Yasha Matsum. in l.c. (1902) 4 (p.p.).

Alnus firma Sieb. et Zucc. var. *Yasha* Winkl., l.c. (1904) 104 (p.p.).

Alnus firma Sieb. et Zucc. subsp. *hirtella* C.K. Schneider in l.c. (1916) 506.

Nom. Jap. Miyama-yashabushi. Distr. Honshu.

Alnus Sieboldiana Matsum. in l.c. (1902) 3, t. 1.

Alnus firma Sieb. et Zucc. var. *typica* Regel in l.c. (1868) 183 (p.p.).

Alnus firma Sieb. et Zucc. sensu Franch. et Sav. l.c. **1** (1875) 457 (p.p.); C.K. Schneider in l.c. (1916) 506 (p.p.).

Alnus firma Sieb. et Zucc. var. *Sieboldiana* Winkl., l.c. (1904) 104.

Nom. Jap. Ohba-yashabushi. Distr. Honshu.

This species is a good one and distinguishable from *Alnus firma* as follows.

Alnus Sieboldiana Matsum.: Branchlets and leaves glabrate; strobiles solitary (rarely 2); when a branchlet has both pistillate and staminate catkins, the latter is lateral and situated below or between the former, and leafy branchlet from the terminal bud.

Alnus firma Sieb. et Zucc.: Branchlets and leaves glabrescent or pubescent (var. *hirtella* Franch. et Sav.); strobiles 1—3, racemose; when a branchlet has both pistillate and staminate catkins, the latter is generally terminal and lateral above the former and as the strobiles grow after blossom the part of the branchlet above the insertion of the raceme of strobiles withers and remains at the base of the raceme, and leafy branchlets from lateral buds below.

○ 佐藤邦雄氏の「佐久の植物方言」(木村陽二郎) Y. KIMURA: Local botanic names in the Saku district, Naganoken by Kunio Sato.

佐藤邦雄氏は軽井沢中学に教鞭をとつておられる謙譲な方で古くから山野に植物に親しまれた。この度、長い年月あつめておられた佐久地方植物方言がまとまつて一冊の書物として出版されたことは眞に喜ばしい。アイウエオ順の方言でこの植物名と方言の意味とか効用とかがわかる。次に「和名で呼ばれている植物」「和名と同じ方言で呼ばれる植物」「方言から和名索引」「和名から方言索引」の項目で方言と和名の関係を述べ盡している。それでカミソメバナはクサフジをさすこともありツユクサをいうこともあるし、ギボウシをウリッパ、ゲイロッパ、コウレツパ、コウレンバ、ヤマカンピヨウなどということがわかる。ただこゝに佐久地方の小分けの場所で方言が違うならばそれを記していただきたかつたと思う。私は軽井沢でウリッパの方言をきき、葉柄をとつて葉身が道ばたに

棄てられているのをみて瓜の皮を思い出しウリッパの意味をさとつたが佐藤氏もかく推定されていることが愉快であつた。それはゲイロッパの方言をみてもうなづけることである。(このことは必ずしも他處のウリュウの方言を湿つた地に生える草を意味することに反対するものではない)。軽井沢で育つた娘が「キュウリなれスイカなれ」と五六度くりかえしながらワレモコウの葉を手にとつてたき私の鼻先にもつてきて「キュウリの匂がする? スイカの匂がする?」ときいたことがあつたが、彼女によればキュウリの匂だそうで、もし「スイカなれキュウリなれ」といえばスイカの匂がするそうだ。佐藤氏の本にウリッパの項に「ギボウシとワレモコウを言う。ギボウシは葉がウリに似ているので言う、若い葉柄を煮て食べる。ワレモコウは葉の香がキュウリに似ているので言う」と記されている。この書をよむといろいろの草木で子供の生活にふれることもできる。このような書物が日本の各地からぞくぞくと出現することを待ちのぞむ。最後に学問的にも教育的にも大切ではあるが特殊的なものと世間からみられるこのような書物を出版された北佐久教育会に敬意を表する。(昭和 25 年 1 月北佐久教育会発行、発行所岩村田町 岩村田活版所、164 頁、定価 80 円)

○ 泰西の肉桂 (Cassia) と古代日本の桂 (Katsura) との連關に就て (藤田安二*) Yasuji FUJITA: The relation between the name Cassia in the West and Katsura in the ancient Japan.

泰西に於ける肉桂 (Cassia) の語原は Greek の Kasia, Hebrew の Qesia を経て Assyria の Kasiya, Kasu にさかのぼる。¹⁾

古代に於ける Cassia は肉桂の総称であつて, *Cinnamomum Tamala* Nees, *Cinnamomum Cassia* Bl., *Cinnamomum zeylanicum* Breyn., *Cinnamomum obtusifolium* Nees, *Cinnamomum iners* Reinw. 等近似種すべてを含み、たゞ上品下品等の区別があつたに過ぎない。このうち恐らく *Cinnamomum Tamala* Nees が最も早く知られ、²⁾ 交通交易が進むにしたがい *Cinnamomum zeylanicum* Breyn., *Cinnamomum Cassia* Bl. に及んで品位も向上し、区別も明瞭になつたのである。

Cinnamomum Tamala Nees, *Cinnamomum obtusifolium* Nees 等の印度に於ける産地は Indus から Bhotan に及ぶ Himalaya 地方, Sikkim, Assam, Silhet, Khasia Hills 等であつて、この地方のものが先づ利用された事は間違ない。

然して上記 5 種の近似種の分布から見ると Assam 地方及び支那雲南省方面が分布の

* 通産省大阪工業試験所精油研究室

1) Laufer: Sino-Iranica (1919) 542.

2) 著者は Aryan の印度侵入と共に肉桂の利用交易が始つたものと考えへる。